

序 文

池田知久

ここに、上海博楚簡研究会（事務局は東京大学文学部東洋史学研究室）の学術雑誌『出土文献と秦楚文化』を刊行する。

この研究会が発足したのは、馬承源主編『上海博物館藏 戦国楚竹書』（二）（2002年12月、上海古籍出版社）が中国、上海で発行され、日本に将来されて我々に読めるようになったすぐ後のことである（2003年4月）。それ以来、今日に至るまでの約1年間、合計7回の研究会を開催して、この書に収載されている上海博楚簡を参加メンバーの輪番制で順次、読解してきた。

以下に、研究会の発表者（敬称略）、発表の題目、開催の時期・場所などを記す。

- | | | |
|-----|--|-------------|
| 第1回 | 西山尚志（大東文化大学大学院修士課程学生）『民之父母』を読む
2003年4月 大東文化会館 | |
| 第2回 | 谷中信一（日本女子大学教授）
2003年5月 大東文化会館 | 『魯邦大旱』を読む |
| 第3回 | 小寺敦（日本学術振興会特別研究員）
2003年6月 東京大学文学部 | 『子羔』を読む（前篇） |
| 第4回 | 小寺敦（日本学術振興会特別研究員）
2003年7月 東京大学文学部 | 『子羔』を読む（後篇） |
| 第5回 | 李承律（東京大学文学部専任講師）
2003年9月 東京大学文学部 | 『容成氏』を読む（一） |
| 第6回 | 李承律（東京大学文学部専任講師）
2003年11月 東京大学文学部 | 『容成氏』を読む（二） |
| 第7回 | 李承律（東京大学文学部専任講師）
2004年3月 東京大学文学部 | 『容成氏』を読む（三） |

そして、今後もしばらくの間は、このやり方で研究会を続けていきたいと計画している。同じ志を有する研究者諸氏の参加を心から歓迎する者である。

この『出土文献と秦楚文化』創刊号に掲載されている譯注は、以上の記した研究会活動の成果の一つに他ならない。すなわち、第1回～第4回の研究会において都合3名の研究者が発表した読解原稿に基づき、それぞれが元原稿に補足・修正の筆を加えて成ったものである。同人の3名に對しては、研究会における発表と原稿の補足・修正に拂われた多大な労苦と學問的な情熱に心から敬意と感謝の意を表すとともに、讀者諸氏に對しては、讀解の内容に誤りの少なからぬことを恐れてご示教とご叱正をお願いしたいと思う。

この創刊号に續いて、第2号以下を刊行する計画も具體的に進んでいるが、當分

の間は上海博楚簡を中心に新出土資料の譯注と論文を掲載する予定である。

今日、中國古代文化の研究を志す者にとって、新出土資料がその眞實に肉薄する知見をもたらしうる極めて重要な資料であるという認識は、日本や世界の學界に幅廣くしっかりと定着している。これらは、そのおびただしい數量と重要な内容をもって、それを無視あるいは輕視したのではもはや有意義な中國古代文化の研究を行うことを不可能にしてしまった。それゆえ、今日、春秋・戰國から後漢にかけての時代の中國文化の研究を志す者は、その全體像を畫こうという者であれば言わずもがな、個別の年代のあれこれのテーマについて分析しようという者であっても、これらの新出土資料の検討抜きには前に進むことができないのである。

このような新出土資料を分析対象とする研究、これらを利用して進める思想・歴史・文學の研究など、何らかの形で新出土資料に關係する諸研究の中で、最も深い基礎に置かれるべき作業は、言うまでもなく原資料の文字・表現・意味内容などを正確かつ堅實に讀解することである。この讀解作業を最深の基礎にして、その上に各種各様の學問も美しい花を咲かせることができる。そうした意味で、この『出土文獻と秦楚文化』が計劃している譯注・論文作りは、人目につくことの少ない地味な野良仕事であるかもしれないが、上海博楚簡などの新出土資料に關係する諸作業の中で、今日、眞っ先に着手すべき最も緊要な學問的営みである、と言わなければならない。

讀者諸氏の善意ある關心・注目と鼓舞・激励を切に希望したい。

(2004年2月)

(大東文化大學文學部教授)